

スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く掲げ、国際非合法党を建設せよ!

赤報

1978年8月25日発行

共産主義者同盟 (RG)

第26号 200円 発行人 野村 忠

部落解放闘争の前進のために

序

昨年八月九日の狭山差別裁判上告棄却判決から一年、我々はブルジョアの上告棄却攻撃に対する新たな憎悪をもやして、部落解放闘争を闘っていかなくてはならない。朝鮮南部、東アジアに対する侵略・反革命を強めている日本帝国主義は、部落差別の煽動を強化し、東部高層は、部落解放同盟・狭山弁護団の再審要求に対する却下攻撃を企んでいる。日本共産党第一派は国民的融合論を

(一) 国民的融合論批判の意義

日本共産党第一派の社会帝国主義者としてのブルジョアへの身売りは、ますます際立って進行している。なかでも部落解放運動の分野における彼等のブルジョアへの屈服と追従は、いさぎよくとまでいっている。宮本一派の「国民的融合論」は全くブルジョア自由主義的なものであり、彼等のプロレタリアート独裁の否定、民主連合政府、革新統一戦線論と一体のものである。今日、部落差別は基本的に解消の過程をたどっており、部落問題解決の客観的条件は大きく成熟している。したがって、差別を利用してしよと一切の反動勢力の手をしばり、憲法が保障する基本的人権を真実に獲得するための民主的政治革新を実現するならば資本主義体制の枠内でも部落問題は解決することができる。(馬原鉄男「新しい部落解放の理論」一五—一六頁)

「部落地名総鑑」(部落リスト)等の相次ぐ出版と大企業によるその購入、狭山上告却攻撃、「同和対策事業特別措置法」の打ち切り策動等々、日本帝国主義ブルジョアが、侵略・反革命を強化して、現役労働者に対する搾取と抑圧の強化とともに、部落民に対する差別と抑圧を強化している。宮本一派は部落差別解消論を唱え、「部落問題解決の客観的条件は大きく成熟している」と叫んでいる。宮本一派は国民的融合論を唱えることによって、部落の自主的解放のための闘争とプロレ

が、マルクス主義を自由主義に改ざんし、ブルジョア民主主義を美化することによって、封建連制論を擁護できなくなっている。この封建連制論の破産を確立するに努めるのである。宮本一派は議院主義、ブルジョア協調主義を純化し、社会帝国主義に純化していくことによって、部落解放運動に對しても次々と敵対していったのであり、この過程は封建連制論の破産でもあったのである。この破産と敵対を理論にまで高め、粉飾したものがある。「国民的融合論」の「国民的融合論」という命題に反對して、宮本一派は「国民的民主的意識」の「信頼」といったことまでも出出してブルジョアの部落差別煽動の支柱になつていく。

「解同」朝田 松井派は「部落の共同体的まとまりだけを時代錯誤的に強調し、現に混住がすすむ、彼等の主張は、彼等の部落差別論を解決することができるといふのである。彼等の主張は、部落差別論と結びつており、封建連制論と結びつており、資本主義とブルジョア民主主義の美化と結びついている。

「わが国の部落差別も身分的差別であり、現在のそれは身分的差別の残りである。(神利夫「国民的融合論の展開」一三頁)「部落解放とは封建的旧身分による不当な差別からの市民的自由をかちとることであり、封建社会で固定化された身分差別的なあらゆる形態の残りもを掃蕩することであり、それは社会的に過去の身分制のゆえに差別される状態を改めて、同じ民族内の平均的な水位にもつていくことである。」(宮本一派の主張である。

(二) 自由主義的身分論の誤り

神利夫の「国民的融合論の展開」序論が「科学的な身分論の誤り」を示している。身分論とは、宮本一派の主張の核となるものであり、宮本一派の主張の核となるものであり、宮本一派の主張の核となるものである。この主張が誤っているのは、まず封建身分を経済的階級から明らかにすることとを放棄していることである。ここで我々はスターリン主義者の身分論を批判して、宮本一派の主張の核となるものを明らかにする。身分論とは、宮本一派の主張の核となるものであり、宮本一派の主張の核となるものである。この主張が誤っているのは、まず封建身分を経済的階級から明らかにすることとを放棄していることである。ここで我々はスターリン主義者の身分論を批判して、宮本一派の主張の核となるものを明らかにする。

上の封建連制論と、資本主義とブルジョア民主主義の美化による部落差別解消論にもとづいて批判する。我々はこれを統一的に批判することによって部落解放の分野での革命的プロレタリアートの見地を定めていくことに役立てていかなくてはならない。今日の革命的左翼は、急進民主主義の見地を克服し、急進民主主義の作用を承認された要素となる。国家は自分がこのヒエラルキーのたすけなしには存在しえないことを確認する。(エンゲルス「フランク時代」)というように疑いがないが、こうした社会構造は、封建社会の経済制度が、領主に対する農民の土地を媒介とした人身的隷属によってなつてきたことにもとづいており、経済的基礎から説明されなくてはならないのである。そうすることによって組織された封建国家の秘密も明らかにすることができる。

封建身分は封建社会における階級存在の形態であり、封建生産様式における生産手段の所有者としての領主と直接的生産者としての農民との直接的関係のあり方によって規定されたものであって「国家権力の助け」によって身分を説明しようとするのは身分階級論の誤りである。このように身分階級論の誤りをひきわたすことには意味がない。このように身分階級論を説明しようとする見解は元の見解を裏返したものにすぎず、小ブルジョアの思想に他ならない。

「資本論」の復権
(榎原 均著)

「ここにまとめられた著作は共産主義者同盟(RG)赤報」編集委員会の署名で「序章」誌(序章社)に連載された「宇野浩二」を中心とし「共産主義」一四・一五号に連載された「宇野浩二」及び新たに書いた論文とによって成り立っている。

本書の主題は資本家と労働者との関係を交換関係であると主張する見解を批判し、マルクスの資本主義批判を復権し、資本家と労働者との交換関係は流通過程に属する仮象にすぎないことを示すことに置かれない。資本家と労働者との関係を交換関係と見る見解はブルジョア思想であり、他方それが平等な交換ではないことを発見し、この不平等を告発しようとする見解は元の見解を裏返したものにすぎず、小ブルジョアの思想に他ならない。

本書の発行は労働者階級の経済的解放の事業にとって大きな意義を持つであろう。我々は諸兄弟姉妹が本書を實踐の指針とするに努め、非合法党建設の共同の事業に参加されることを呼びかけるものである。
(発光元) 鹿野社
定価二八〇〇円

(三) 封建連制論による資本主義的部落差別の否定

宮本一派のこうした身分論は、封建連制論において農民が、領主に土地を分与されるがその土地に縛りつけられているという領主との間の人身的隷属関係におかれていたこと、すなわち土地所有の身分性にもとづいて、封建制の労働制度が存在した時代、領主が農民から剰産物(江戸時代においては年貢物)を生産物地代として搾取し、支配と被支配という階級関係が多かれ少なかれ存在したことを不問にして置いたこと、その結果として、宮本一派の主張の核となるものを明らかにする。身分論とは、宮本一派の主張の核となるものであり、宮本一派の主張の核となるものである。この主張が誤っているのは、まず封建身分を経済的階級から明らかにすることとを放棄していることである。ここで我々はスターリン主義者の身分論を批判して、宮本一派の主張の核となるものを明らかにする。

「わが国の部落差別も身分的差別であり、現在のそれは身分的差別の残りである。」(神「展開」一三頁)宮本一派は封建身分を国家的属性とするに努め、封建社会における部落民の経済的地位を不問にし、日本資本主義の発展と部落差別の結びつきを否定し、今日の資本主義的部落差別の拡大を否定している。封建身分は階級存在の形態であり、身分を

婦人解放闘争の勝利のために

(一) はじめに

婦人解放の分野での自覚したプロレタリアートの党の態度を...

今日の帝国主義の支配の下でのプロレタリア婦人、勤労婦人の地位を具体的に分析すること等々の一連の系統的な作業を我々は果たさなければならず、全般的政治新聞の定期的発行を手段として、広範なプロレタリア大衆の階級闘争と結びつき、真剣な党派闘争を組織することによって、共産主義政党の任務を果していかなくてはならない。

「婦人の社会的・人間的な地位」と生産手段の私有との不可分の結びつきが鋭くあらわにされなければならない。(「レーニンの婦人問題論」クララ・ツェッキン。国民文庫版「婦人論」一三九頁)

このレーニンの提起を我々は継承する立場から、この論文では階級闘争の発生と男性による女性の抑圧の発生とがどのように一致し、資本の支配を打倒すべきプロレタリアートの闘いと婦人の解放とがどのように結びついているかについて、原則的な問題を明らかにしていく。

(二) 階級抑圧の発生と男性による女性の抑圧は一致する

原始共産制の時代には女性の地位は高かった。このことは原始の集団婚の下では母系による血統以外にありえなかったこと、及び狩猟や漁撈が主要な産業であった中で女性の家事労働が公的産業として占めていた高い地位にもとづいている。自然淘汰が、血縁者の婚姻紐帯からの排除を推進することによって、未開の段階では人類はすでに一対の結合のゆるい対偶婚家族を発生させていたが、対偶婚家族はその結合のゆるさによって自己の世帯を必要とせず、以前の時代からうけつた共産制世帯を解して共産制世帯というものは家内における女性の支配を意味した

動のすべての教訓から学ぶこと、今日の帝国主義の支配の下でのプロレタリア婦人、勤労婦人の地位を具体的に分析すること等々の一連の系統的な作業を我々は果たさなければならず、全般的政治新聞の定期的発行を手段として、広範なプロレタリア大衆の階級闘争と結びつき、真剣な党派闘争を組織することによって、共産主義政党の任務を果していかなくてはならない。

「婦人の社会的・人間的な地位」と生産手段の私有との不可分の結びつきが鋭くあらわにされなければならない。(「レーニンの婦人問題論」クララ・ツェッキン。国民文庫版「婦人論」一三九頁)

このレーニンの提起を我々は継承する立場から、この論文では階級闘争の発生と男性による女性の抑圧の発生とがどのように一致し、資本の支配を打倒すべきプロレタリアートの闘いと婦人の解放とがどのように結びついているかについて、原則的な問題を明らかにしていく。

「戦争がこれを供給した。すなわち、捕獲が奴隷に転化した。すなわち、最初の大きな社会的分業である。最初の大きな社会的分業は、その労働の生産性の、したがって富の増大につれて、そしてその生産分野の拡大につれて、所与の歴史的な全条件のもとで、必然的に奴隷制をもたらした。最初の大きな社会的分業から、二つの階級への社会的な最初の大きな分業が生じた。すなわち、主人と奴隷、搾取者と被搾取者への分業が、(同、二二二頁)

やいなや、対偶婚と母権制氏族ともなく社会は強力な一撃を与えられることになる。自然発生的に存在していた両性の分業によれば、食料の調達に夫の必要労働手段の調達は夫の仕事であり、労働手段の所有は夫に属していた。畜群が新しい生活の手段となり、その馴致と見張りとが夫の仕事となったことは、家畜を彼の所有物とし、家畜と交換に得られた商品や奴隷も彼のものとなった。こうして富が増加するに比例して、この富は一方では家族内で、男性は女性よりも重要な地位を与え、他方では、この強化された地位を利用して、従来の相対的地位を有利なようにくつがえそうとする衝動を生みだした。(「母権制の転覆は女性の世界史的な敗北であった。男は家内から耳をさげ、女は威厳の地位からおとされ、隷属された。男の情欲の奴隷、たんなる子を生む道具となった。」(同、七三頁)

「この社会では、家族の秩序は完全に所有の秩序によって支配され、いまや階級対立と階級闘争が自由に展開を始めるが、これが、従来からのすべての書かれた歴史の内容をなすのである。(同、一〇〇頁)

「自然の条件にはなく経済的条に、つまり本源的な自然発生的勝利にもとづく、最初の家族形態であった。」(同、八六頁)とされることの意味をつかみとらなくてはならない。一夫一婦制が歴史に登場するのは、かつて男女の相合としてではなく、男性による女性への圧制としてであり、文明社会を通して貫かれる男女の抗争の宣言としてである。

「歴史に現れる最初の階級対立は、一夫一婦制における男女の敵対関係の発展と一致し、また最初の階級抑圧は、男性による女性の抑圧と一致する。」(同、八六―八七頁)

「この社会では、家族の秩序は完全に所有の秩序によって支配され、いまや階級対立と階級闘争が自由に展開を始めるが、これが、従来からのすべての書かれた歴史の内容をなすのである。(同、一〇〇頁)

「原始共産制において女性に対しては家庭とその支配を保障して、たこの、女性が自然発生的な両性間の分業において家事労働に局限されていたという事情が、私的の所有階級(奴隷制)の発生によって、家庭の男性による女性の支配をもたらした。すなわち、女性が大きな社会的な規模で生産に参加することなく、世帯の若役から解放されることによ

の意義が強調されなければならないが、一夫一婦制の内部での旧来の家族制度の解体がいかにかつていかに見えて見えない、大工業は、それが家政の領域の彼方なる社会的に組織された生産過程において婦人、少年少女をおよび児童に割当る決定的役割をもつて、家族および両性関係のより高度な形態のための新たな経済的基礎を創造する。」(「資本論」第一巻、三二五―三二六頁)とされるのは正しい。

しかし、資本主義の生産様式が準備する婦人解放の物質的条件は資本の統治の下への婦人および児童労働の編入による労働力の価値の低下、労働婦人自身の精神的・肉体的荒廃、プロレタリアの強いられた無家庭・無親の体である。ブルジョアが資本のくびきを強化し、婦人に対する経済的圧迫を強めることに対して、男女プロレタリアートが断固として闘争し、資本の支配を打倒するために闘争することによってのみ、プロレタリアは資本主義の胎内に準備した婦人解放のための物質的条件を利用することができる。

資本主義の生産様式の初期の段階に比べれば、今日の婦人労働、児童労働の資本の統治の下への編入の実態は、プロレタリアートの階級闘争の前進によって変化しており、特に今日では児童労働の制限がある。しかし、婦人労働者が資本の支配によってうけている経済的抑圧の性格は変わっていない。(「今日の日本資本主義における婦人労働」) (資本主義の権力が維持されているところ、男子はその特権を保持している。

「近代の個別家族は、妻の公然たる隷属の家庭内奴隷制のうえに築かれており、そして近代社会は個別家族だけをその構成分子とする一つの集団なのである。」(「起源」九七頁)

「職業生活と育児等の家庭責任を、婦人の家内奴隷としての地位を維持強化している中で、婦人労働者は、賃金奴隷でありかつ家内奴隷であるという二重の奴隷状態

名をかかげた日本帝国主義のいわゆるライフ・サイクル計画は、すでに述べたようなプロレタリア婦人に対する資本の支配の意図を公然と表現したものである。すなわち、若年期には婦人の柔軟性の大きさを利用し、密度の高い純労働を行わせ、二〇歳代後半から三〇歳代前半の時期には若年定期制を適用して退職させ、中高年期にはふたたびプロレタリアの心づいた家計につけてこんで、パート労働にひきだし、また家内労働者として搾取することによって中小零細企業の存立基盤とし、独占資本が下請企業を収奪する基盤とする等々。技術革新による労働密度の強化と単純労働は婦人労働者の職業病を生みだし、また彼女達の母性を破壊している。にもかかわらず日本帝国主義ブルジョアは労働法、改正、母性過保護論を支柱として叫ぶことによりプロレタリア婦人に牙をむいて

ブルジョアによる婦人労働者に対する経済的抑圧が、世帯の若役が縛りつけられていくことをアコとして行われており、プロレタリア婦人は、賃金奴隷でありかつ家内奴隷であるという二重のくびきの下におかれていることは明白である。

だが婦人労働者の二重の奴隷状態は、婦人労働者が婦人解放の中心部隊となることのできる根拠でもある。婦人の社会的・人間的地位と生産手段の私有との不可分の結びつきを彼女達は自分の生活にうけて、もともとも明らかにすることができ、資本主義の抑圧は、ブルジョア民主主義がうたう形式的な平等と全く対立しており、また資本主義は男子から保護することを許さず、労働者に保障することを許さない。労働者が労働者自身の手で果たさなければならないのと同様に、婦人労働者の解放は婦人労働者自身の手で果たされなければならない。自覚したプロレタリアートの党の婦人解放の分野での政策は、資本主義の打倒にむけて、労働者を組織し、婦人労働者を中核とするものでなければならず、また男子労働者が存在しているブルジョアの「主人」の観念

を広い系統的な政治教育の活動によって徹底的に根たやしし、男女プロレタリアートの共同の事業として、資本主義と家内奴隷制に対する必死の闘争を組織することではなければならない。男女差別をなくして、男女平等を実現する道は、資本主義社会を社会主義社会に変革しないが実現しない。今日社会では、すでにうけつた法律を、その規定どおり実施させ、職場や地域や社会のすみずみまで民主主義を徹底させていくことで大きく実現していくのです。だからこそ、民主主義をせよ、それをまもり、発展させていく運動の重要性が、今日強く叫ばれるのです。」(柴田悦子「現代の婦人労働者」八八頁)などによって、資本主義とブルジョア民主主義を美化して

ブルジョアをうたおしたプロレタリアート独裁の政府は、男女の法律上の平等をはじめとして、現、婦人を社会主義経済に、立法と行政に参加させるだろう。ブルジョアからの生産手段の取奪、その社会の共有財産への転化の上に立って、共同調理場、公共食堂、託児所、幼稚園、子供の家庭を設立し、プロレタリアート、労働大衆の小さな家計がうけつてきた経済的機能と教育的機能とを社会的なうけもちにうつしかえ、世帯の若役と男子への従属から婦人を解放する仕事をプロレタリアートは遂行してゆく。共産主義革命なくして婦人の解放はありえず、幾百万労働婦人の獲得なくして社会の共産主義的変革はありえない。婦人解放と共産主義の勝利のために前進しよう。

(三) 婦人労働者の地位と共産主義革命

「原始共産制において女性に対しては家庭とその支配を保障して、たこの、女性が自然発生的な両性間の分業において家事労働に局限されていたという事情が、私的の所有階級(奴隷制)の発生によって、家庭の男性による女性の支配をもたらした。すなわち、女性が大きな社会的な規模で生産に参加することなく、世帯の若役から解放されることによ

中央集権主義の組織思想に関する論争

一党建設の新たな段階を切り拓くために (三)

はじめに

「赤報」二一三「号」建設の新たな段階を切り拓くために」論文に対して、党内で多くの意見が提出された。われわれはそれなかにいくつかの意見とそれなかに党内論争を紹介し、これらを検討することによって、二一三「号」論文の提議を研究してゆくための素材を提供する。

論争にあがったのは二一三「号」七段中央部で展開されている「同志に与える手紙」の解釈をめぐってであり、中央集権主義の組織思想の理解をめぐるのである。指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化をどのように把握するかという点にかかわるものであった。この論争の背景には何

(A) 『何をなすべきか』

第四章に関する意見

(一) A同志の意見

『何をなすべきか』第四章の解釈をめぐる意見は、一〇・三以降に「序章」二一・四号に連載された「国際共産主義運動の歴史的教訓(以下「教訓」と略す)への批判」として提起された。第一の論点は「教訓」(二)では「何をなすべきか」第四章(d)組織活動の規模と「何をなすべきか」第四章(e)同志の意見とを同様に扱っている」ということである。A同志は「何をなすべきか」第四章(e)から引用した上でこの見解の論議に入っている。この中で「何をなすべきか」第四章(e)の当該箇所の教訓を示した上でA同志の意見を述べた。A同志の意見は、

①「『何をなすべきか』第四章(e)の当該箇所は、同志の意見と同志の意見とを同様に扱っている」ということである。A同志は「何をなすべきか」第四章(e)から引用した上でこの見解の論議に入っている。この中で「何をなすべきか」第四章(e)の当該箇所の教訓を示した上でA同志の意見を述べた。A同志の意見は、

②「『何をなすべきか』第四章(e)の当該箇所は、同志の意見と同志の意見とを同様に扱っている」ということである。A同志は「何をなすべきか」第四章(e)から引用した上でこの見解の論議に入っている。この中で「何をなすべきか」第四章(e)の当該箇所の教訓を示した上でA同志の意見を述べた。A同志の意見は、

(二) 『教訓』における混同の原因について

『教訓』(二)ではA同志の指摘する通り「何をなすべきか」第四章(e)で展開されている秘密の機能の集中と、(d)で展開されている集中と専門化の「集中化」とを区別していない。だからこのことを指摘したのはA同志の功績である。ところがA同志は「教訓」(二)が何故区別出来ていなかったのかについて十分分析していない。このこととA同志が「教訓」(二)の見解がわれわれの党建設の第一段階における中央集権主義の組織思想に関する把握の批判的総括として提起されていることに注意していただきたい。

こうした把握は、二一・一八の「中央集権主義は、秘密の機能の集中と同志の意見とを同様に扱っている」ということである。A同志は「何をなすべきか」第四章(e)から引用した上でこの見解の論議に入っている。この中で「何をなすべきか」第四章(e)の当該箇所の教訓を示した上でA同志の意見を述べた。A同志の意見は、

(三) A同志の意見の検討

政治的意味と混乱に陥っている諸点

『教訓』(二)における専門化の位置づけの不十分性が、われわれの党建設の第二段階における実践に根拠をもったものであった以上、「教訓」(二)への批判は、党建設の新たな段階を切り拓くために必要なことである。同志の意見と同志の意見とを同様に扱っている」ということである。A同志は「何をなすべきか」第四章(e)から引用した上でこの見解の論議に入っている。この中で「何をなすべきか」第四章(e)の当該箇所の教訓を示した上でA同志の意見を述べた。A同志の意見は、

①「『何をなすべきか』第四章(e)の当該箇所は、同志の意見と同志の意見とを同様に扱っている」ということである。A同志は「何をなすべきか」第四章(e)から引用した上でこの見解の論議に入っている。この中で「何をなすべきか」第四章(e)の当該箇所の教訓を示した上でA同志の意見を述べた。A同志の意見は、

(四) 「秘密の機能の集中」は革命家

組織と労働者の組織との結合方法を規定している

A同志が⑥で「集中と専門化」の「集中」と秘密の機能の集中とを二重写ししていると批判したことは正しかった。だがA同志が「秘密の機能の集中」と「集中と専門化」との関連について考察しようとするとき、両者を切りはなし、その結果「秘密の機能の集中」と

政治的意味と混乱に陥っている諸点

『教訓』(二)における専門化の位置づけの不十分性が、われわれの党建設の第二段階における実践に根拠をもったものであった以上、「教訓」(二)への批判は、党建設の新たな段階を切り拓くために必要なことである。同志の意見と同志の意見とを同様に扱っている」ということである。A同志は「何をなすべきか」第四章(e)から引用した上でこの見解の論議に入っている。この中で「何をなすべきか」第四章(e)の当該箇所の教訓を示した上でA同志の意見を述べた。A同志の意見は、

